

2021 年度 授業計画(シラバス)

学 科	言語聴覚士学科昼夜間部		科 目 区 分	専門分野	授業の方法	講義演習
科 目 名	吃音		必修/選択の別	必修	授業時数(単位数)	30 (1) 時間(単位)
対 象 学 年	2年生		学期及び曜時限	前期 木曜	教室名	402他
担 当 教 員	氏平 明	実務経験と その関連資格				
《授業科目における学習内容》						
<p>症状が多様な発話の非流暢性の一つとして表出する吃音を、ほかの非流暢性と症状から区別する評価能力、ならびに吃音者の特に弱いところを見つける評価能力を養う。また症状に介入する直説法や認知面を矯正する認知行動療法を用いて、吃音の症状を軽減するセラピーの方法を実践する能力を養う。</p>						
《成績評価の方法と基準》						
<p>学期末の持ち込みなしの筆記試験で、発話の非流暢性の転写・記述も含む、また学習した知識だけでなくそれを駆使した考察も問う。この試験の結果のみで判定する。</p>						
《使用教材(教科書)及び参考図書》						
<p>担当教員の論文と欧米で出版されたものの和訳をハンドアウトに取り入れて用いる。吃音の臨床で認知行動療法はテキストとして、清水栄司監修『認知行動療法のすべてがわかる本』講談社を用いる。参考図書はバリー・ギター著『吃音の基礎と臨床』学苑社, Yairi・Seery, 『Stuttering』, Howell・Borsel(eds)『Multilingual Aspect of Fluency Disorders』</p>						
《授業外における学習方法》						
<p>専門科目の独学は不可能です。したがって授業で学んだ事柄を復習するとともに、実際の自分や他の人のことばの中に現れる発話の非流暢性を見つけて、観察や反芻をして、吃音とどう違うのかということの内省と他人の発話の観察と学んでいる知識とを結びつける練習を繰り返す。</p>						
《履修に当たっての留意点》						
<p>吃音について、よく言われていることはすべて間違いです。したがって吃音についてはゼロから謙虚に学んでいく必要があります。専門科目は暗記の科目ではないので、用語を正確に使い、ことばの背後のシステムを、その理論・理屈を理解していかなければなりません。</p>						
授業の方法	内 容			使用教材	授業以外での準備学習 の具体的な内容	
第1回	講義形式	授業を通じての到達目標	吃音を包含する発話の非流暢性を理解する。	ハンドアウト(氏平論文「吃音の音韻論的分析」『現代音韻論動向』2016,)	ハンドアウトの下読みと復習	
		各コマにおける授業予定	発話の非流暢性とは、吃音とは、DSM-5とICD10,吃音の疫学的調査			
第2回	講義形式	授業を通じての到達目標	吃音の症状を理解できるようになる。	ハンドアウト(バリー・ギター『吃音の基礎と臨床』より)	ハンドアウトの下読みと復習	
		各コマにおける授業予定	1次障害と2次障害, 吃音者に見られる傾向とその背景			
第3回	講義形式	授業を通じての到達目標	様々な正常からの逸脱を抽出できるようになる。	ハンドアウト(複数の氏平論文とCurlee・Siegel(eds)『Nature and Treatment of Stuttering』)	音声学・音韻論の総復習	
		各コマにおける授業予定	スピーチエラー, 吃的非流暢性, 吃様症状, 早口症, 吃音等々			
第4回	講義形式	授業を通じての到達目標	吃音者と非吃音者の非流暢性を区別できるようになる。	ハンドアウト(氏平論文「言語学分析からの吃音治療の展望」コミュニケーション障害学会,)	音声学・音韻論の総復習	
		各コマにおける授業予定	発話の非流暢性の頻度, 形態, 音声の移行, 吃音の音声言語的特徴			
第5回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	発話の非流暢性からの分節と音声の移行が分析できるようになる。	同上ハンドアウトと吃音症状の録音	音声学・音韻論の総復習	
		各コマにおける授業予定	2分の吃音症状録音をIPAで転写し, 記述する演習			

授業の方法		内 容		使用教材	授業以外での準備学習の具体的な内容
第6回	講義演習形式	授業を通じての到達目標	吃音者(話者の)の弱点の発見とその評価を理解し、それらを実践できるようになる。	同上ハンドアウトと吃音症状の録音	音声学・音韻論の総復習,ここまでの演習のまとめ
		各コマにおける授業予定	2分の発話に含まれる約30の非流暢性の統計的分析から話者の非流暢性の傾向をつかむ演習		
第7回	講義形式	授業を通じての到達目標	吃音者の弱点:遺伝,運動機能,脳機能を理解する。	ハンドアウト(氏平論文「吃音の音韻論的分析」『現代音韻論動向』2016,)と吃音症状の録音	第1回,第2回の復習
		各コマにおける授業予定	遺伝の可能性,運動機能の弱点,脳の機能画像から得られる解剖学的知見からの判断		
第8回	講義形式	授業を通じての到達目標	吃音者の発話の症状と吃音者の弱点の結びつきを理解できるようになる。	ハンドアウト(氏平論文「吃音の音韻論的分析」『現代音韻論動向』2016,)と吃音症状の録音	第6回,第7回の復習と演習で見つけた発話の傾向を確認する
		各コマにおける授業予定	症状の記述分析結果と吃音者の弱点との結びつきを考察する		
第9回	講義形式	授業を通じての到達目標	話者の弱点を知り,その弱点の補強法を考案できるようになる。	ハンドアウト(氏平論文「発声時の振幅のゆらぎに見る吃音者と非吃音者」2013.『音声研究』)と吃音症状の録音	言語学の有標無標の復習,音声学の調音の難易を復習
		各コマにおける授業予定	易から難へ,か難から易へか,言語の有標性を避ける工夫等		
第10回	講義形式	授業を通じての到達目標	吃音の音声言語的側面,認知的側面,心理的側面,社会的側面からのアプローチを理解し,それらのアプローチを実践できるようになる。	ハンドアウト(川合論文「吃音に対する認知行動療法的アプローチ」2010,『音声言語医学』)	川合論文に目を通す
		各コマにおける授業予定	CALMSモデルの提唱と認知行動療法の有効性		
第11回	講義形式	授業を通じての到達目標	認知行動療法を理解できるようになる。その1	テキスト『認知行動療法のすべてがわかる本』	テキストの項目と理論の部分を読んでおく
		各コマにおける授業予定	認知行動療法の基礎:理論と実践		
第12回	講義形式	授業を通じての到達目標	認知行動療法を理解できるようになる。その2	テキスト『認知行動療法のすべてがわかる本』	認知行動療法の手順をテキストで確認しておく
		各コマにおける授業予定	認知行動療法の応用		
第13回	講義形式	授業を通じての到達目標	吃音者へ認知行動療法を応用できるようになる。	ハンドアウト(森浩一ハンドアウトから抜粋)	吃音者の認知とその問題点を確認し,その療法の手順となる用語を覚え,確認する。
		各コマにおける授業予定	認知行動療法を吃音に応用する。その有効性と限界		
第14回	講義形式	授業を通じての到達目標	吃音評価法の世界基準を理解し,その評価法を実践できるようになる。	ハンドアウト(バリー・ギター『吃音の基礎と臨床』より)	転写と記述に用いた対象をSSI-IIIにあてはめて,評価してみる。
		各コマにおける授業予定	SSI-IIIの検査法とその有効性と限界,リッカムプログラム,その漸進性		
第15回	講義形式	授業を通じての到達目標	日本の古典的な吃音検査法を理解する。	ハンドアウト(音声言語医学会の吃音検査法試案1981,)	ここまでに習った吃音と古典的な吃音検査法とを比べてみる。
		各コマにおける授業予定	臨床の流れ,各種検査,重症度の評価,この検査法の限界と問題点		